



昭和20年3月10日午後1時玄関前での土中45回卒業記念写真
(中45回大塚保氏蔵)

既に軍関係学校などへの入学・入隊者は陸士・海兵・予科練等20名以上あり、この写真には宗光空太郎校長を含め170名が写っている。

戦時下の土浦中学生14

～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い4～ (霞ヶ浦その26)

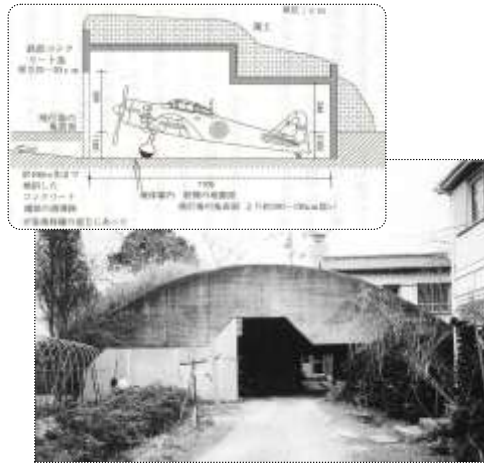
1944(昭和19)年7月6日、マリアナ諸島のサイパン島が陥落し、そこから発進した米軍機による本土空襲が始まりました。霞ヶ浦海軍航空隊・土浦海軍航空隊(予科練)・第一海軍航空廠(一空廠)などの軍事施設が集中していた阿見地区は、しばしば空襲に見舞われました。今回は、学徒たちの空襲下での戦いを『戦いのなかの青春』・『櫻水物語 戦中派の中學時代』をもとに描いていきます。引用文中の【 】内は筆者による注記です。

本土初空襲

1944年11月以降、偵察飛行を行うB29の姿が、土浦の上空でも、度々見られるようになり、サイパン島を発進したB29が本土を初空襲したのは、11月24日でした。約80機が編隊を組んで、正午過ぎ、東京上空を高度約9000mで西進し、中島飛行機武蔵工場(現在の武蔵野市にあった。)を爆撃しました。そのうちの1機が阿見地区に侵入し、君原村上空を通過する際に、海軍の木原送信所(美浦村木原地区にあった。現美浦村自立支援センター付近)を機銃掃射しました。その流れ弾とみられる曳光弾(弾の飛ぶ方向を確認できる)に燃えながら飛ぶ弾の1発が、石川地区の民家の屋根に命中し、茅葺き屋根に火が付き火災が発生しましたが、発見が早かったため、被害は最小限で食い止められました。中45回の風間雅は、この日の日記に、

「十一月二十四日(金)晴天 作業平常どおり。一二時空襲、待避三時間余、壕より首を出すと空一面飛行機雲だ。高高度で敵機が侵入したのだ。B29の編隊もはじめて見た。」と記しています。1945年に入ると、空襲が頻繁になってきました(中45回の栗栖三男の、1月14・9・27日、2月10日の日記には、「警戒・空襲警報発令、待避」の記載が見られる。)。学徒たちは、警報が発令される度に作業を止め、壕に埋められたときの脱出用として、鑊などの手頃な工具を1個ポケットに入れ、工場内にある完成間近な飛行機を皆で押して掩体壕へ運び込み、それから待避壕の中へ入りました。壕は、天井を板材や木の柱などで支えた手掘りの横穴で、照明はなく両側に腰掛けが付いていました。奥行きは10m位で、その先はT字型に掘られています。天井と地表面は優に5〜6mと厚く、機銃弾も届かないと思われましたが、

爆撃時だけはパラパラと砂が零れ落ちることもあり、空襲が終わると壕から出、掩体壕から飛行機を引き出して工場へ戻し、再び作業を始め、遅れを取り戻すべく残業が続けられました。



旧零戦用掩体壕とその断面図

(いずれも山田敏子氏所有)

一空廠初空襲

2月16日、一空廠が初めて敵機の攻撃に見舞われました。グラマンF6Fなどの艦載機が数度に亘って来襲し、発動機試運転場・大型組立工場の北側などに被害を受け、死傷者も出ました。

この日、学徒たちが朝礼に出ると、拡声器から「本日の朝礼は行わない。」との放送があり、直ちに警戒警報、続いて空襲警報が発令されました。全員が緊張感に覆われて防空壕に退避。午前中に2回、敵機が波状攻撃、一空廠や飛行場周辺に設置してある機関砲が一齐に火を噴いて、さながら最前線のようにでした。正午過ぎには大音響とともに、1機が第四門札場近くに墜落しました。グラマンを追跡して来た零戦でした。不運にも味方の誤射によるものでした。炎上しながら搭載した機銃弾が弾け飛び、消防隊も暫くは手が着けられませんでした。警報が解除されて工場に戻り、昼食が

終わる頃、「総員退避用意」の発令で再び防空壕へ。グラマンの20機編隊が一空廠を襲いました。女子生徒も慌ただしく作業台を離れ、一目散に所定の防空壕に全速力で避難。最後の女生徒が壕の入口に辿り着いたその時、猛烈な爆風が襲って来て、その女生徒は壕の真ん中辺りまで吹き飛ばされました。幸い生命に別状はなく、怪我もありませんでした。壕の中にまで高射砲の音や爆弾の破裂する音が聞こえて来ました。女生徒たちは泣いていました。

17時18分、空襲警報が解除となり、学徒たちが薄暗くなった職場に戻って見ると、大型組立工場の北側解体工場側に250kg爆弾1発が命中、北側の屋根の鉄骨は飴のように曲がり、「桜花」工事部分は目茶苦茶になっていました。「桜花」工事のすぐ側にあった零戦脚部修理班の万力台が逆立ちしてしまい、作業台は跡形もなく吹き飛ばされ、その所に挿鉢型の大きな穴が不気味に空いていました。目の前の変わり果てた光景に女生徒全員が思わず号泣。それを聞きつけた男子生徒が、大声で「戦時下の女学生が、これ位のことで泣くな！」と一喝しましたが、一喝した男子生徒の目にも涙が溢れていました。女生徒たちは、この日の被害やその他の一切を決して口外しないことを誓い、きつとこの仇は討つぞ、との思いで涙ながらに帰宅しました。この空襲で初の戦死者が出ました。戦死者は付近の松林の中で火葬に付され、その遺骨は上司や同僚の手によってそれぞれ故郷に届けられました。

卒業式

3月9日夜、B29の大編隊が日本本土に接近。東京へは279機が高度2000mという低空から侵入し、10日午前0時7分から約2時間半に亘り、町工場と住宅とが犇めく市街地に爆撃が続けられま

を続けました。

した(いわゆる『東京大空襲』)。B 29は、長時間燃焼するナパーム弾を江東区・墨田区・台東区に跨る40平方キロの周囲に投下し、その内側には1665トンの焼夷弾を投下。市街地は完全に火の海と化し、26万8358戸が焼失、100万8005名が罹災しました。死者は8万3793名、負傷者4万918名(警視庁調べ)とされていますが、実際の死者は10万名を超えたと言われています。土中生たちは、夕焼けのように真っ赤に明るくなった東京の空を眺めながら、卒業式の朝を迎えました。中45回生は、1943年1月に公布された「中等学校令(勅令第36号)」により、修業年限が1年短縮され、1年先輩の中44回生と同時卒業となりました。卒業式は常磐線の遅れで午前10時に開始され、『海ゆかば』を歌って式を閉じた後、44回生は射撃場で、45回生は玄関前で、戦闘帽姿の記念写真を撮って解散しました。

3月12日の麻生中での卒業式には、一空廠から動員学徒の代表者が出席しました。3月31日に一空廠兵舎内の浴室で卒業証書伝達式が行われ、校長から卒業証書が授与されましたが、証書は紙質の悪い、なんとも小さい、形ばかりのものでした。

土浦高女の卒業式は3月18日に行われ、生徒たちは最後の校歌で胸がいっぱいになってしまいました。式後、名残を惜しんで各教室でお喋りをしていると、空襲警報が発令され、懇談の途中でのバラバラな別れになってしまいました。

しかし、「新規中等学校卒業者の勤労動員継続に関する措置要綱」によって、卒業生たちは、中等学校に新たに設けられた付設課程に進学させられ、動員はそのまま継続となりました。また上級学校進学者や軍関係学校入学者に対しても、入学3ヶ月延期の措置が採られたので、彼らも6月23日及び27日まで工場勤務



神風の鉢巻を締め若さ漲らせた土浦高女生
(昭和20年3月18日卒業式の日 石塚写真館で
『戦いのなかの青春』より)

空襲激化

3月26日に硫黄島の日本軍が玉砕。硫黄島米軍基地の整備が進むと、本土爆撃はますます激しくなり、加えて米機動部隊から飛来する艦載機の襲来も日常化してきました。艦載機の空襲は昼夜を分かたず、地域も、全国の都市から農漁村にまで及ぶようになりました。攻撃目標は、飛行場や軍事施設はもとより、走行中の列車、航行中の船舶、農耕従事者などの民間人にも及び、空襲に関しては内地も戦場と変わらなくなりました。

沿岸各地に設置された電探(レーダー)が、南方洋上に敵目標を発見し、本土接近を通報すると、廠内放送は「ブーッ」というブザー音とともに、「第二警戒警備と為せ!」との指令を発しました。程なく空襲警報が発令され、「女子並びに動員学徒退避!」の命が下り、「総員退避!」はその後に発令されました。時として、けたたましい空襲警報と同時に「総員退避」が発せられることもありました。工員・軍人など全員の退避が終わると、廠内は一時不気味に静まり返るの

が常でした。

5月28日には、P 51戦闘機30機が侵入し、一空廠の建物2棟と第一軍需工廠(前中島飛行機若栗工場。零戦の組立が行われていた。現三菱化学(株)の建物1棟とが全焼、民家では全半焼家屋2戸、死亡者1名、負傷者3名の被害を受けました。この頃になると、一空廠の工場や海軍施設が近隣の山野に疎開したため、これが新たな攻撃目標となり、付近の住民が被害を被ることもありました。

6月10日・予科練空襲

6月10日には、土浦海軍航空隊(予科練)とその周辺地区とがB 29による大規模な空襲を受け、多くの軍人・町民・家屋などが被災し、予科練生を含む374名が亡くなりました。予科練の南西地区の兵舎群は完全に吹き飛び、周辺には手足のない死体が散らばり、「海鷲のゆりかご」は、一転して阿鼻叫喚の地獄絵図のような光景を呈していました(詳細は本紙89号に掲載しています)。

この時、一空廠に出動していた中45回の高橋邦男は、「航空廠での想い出」として、『戦いのなかの青春』に次のように記しています。

「学校は卒業したものの、土中生として引続き航空廠に通った。忘れもしない、六月一〇日は日曜日であったが、私は、下級生二人と出勤していた。当日は、早朝より空襲警報が鳴り、工場近くの防空壕に避難した。間もなくB 29や艦載機が、大挙来襲して来て、航空廠の上空に差し掛かった途端に、爆弾の落ちて来るのが分かった。ヒューと言う嫌な空気がしたかと思うと、腹を括る様な地響きが出て、防空壕の砂がサラサラッと落ちて来た。

我々もいよいよ最後の時が来たかと思った。長時間の波状攻撃が止んで、東の空を眺めると、【土浦海軍航空隊の一

帯に】黒煙もうもうと立ち込めて、爆弾の物凄いことがわかった。」

また、中48回生は、学校で空襲に遭遇しました。

屋口正一は、その時の様子を「この朝土中三年二組の生徒の殆んどは、動員以来約三ヶ月振りに登校した。未完成の新講堂には万力台が並び、校庭には九三中練が駐機されてゐた。学校へ着く前に早くも警戒警報が発令された。そして大部分の生徒が校内に入った頃空襲警報のサイレンが鳴った。生徒は分散して柔道場北側裏門寄りの壕に入った。上部は土かぶりや薄く、至近弾にはとても耐へられさうもないものであった。それでもいつもの避難時と同じく、帯芯製の袋から防空頭巾を出して被った。

空は雲で覆はれてはゐたが明るかった。その時異様な音が聞こえた。雨か雹でも降る様な『サーッ』といふ風を切る音である。暫し途切れたと思つたとたん、ズズーンと腸(はらわた)に響く震動が大地から伝はつた。音と響きは繰り返した。そして少しづつ移動する様にも思へた。」と綴っています。

更に、7月10日には、右叡の林の中で3名の女子挺身隊員が機関銃弾を浴びて戦死するなど、空襲はその後も続きました。しかし、一空廠の2万余名もの軍人・工員・女子挺身隊員、そして動員学徒は、犠牲者を出しながらも、昼夜兼行で、渾身の力を振り絞って終戦まで働き続けました。

※参考文献

『戦いのなかの青春』戦後五十年 卒業五十年 年 第一海軍航空廠動員学徒の集い(記念誌) 『櫻水物語 戦中派の中学時代』

(中48回・高1回 屋口正一)
(高21回 松井泰寿)